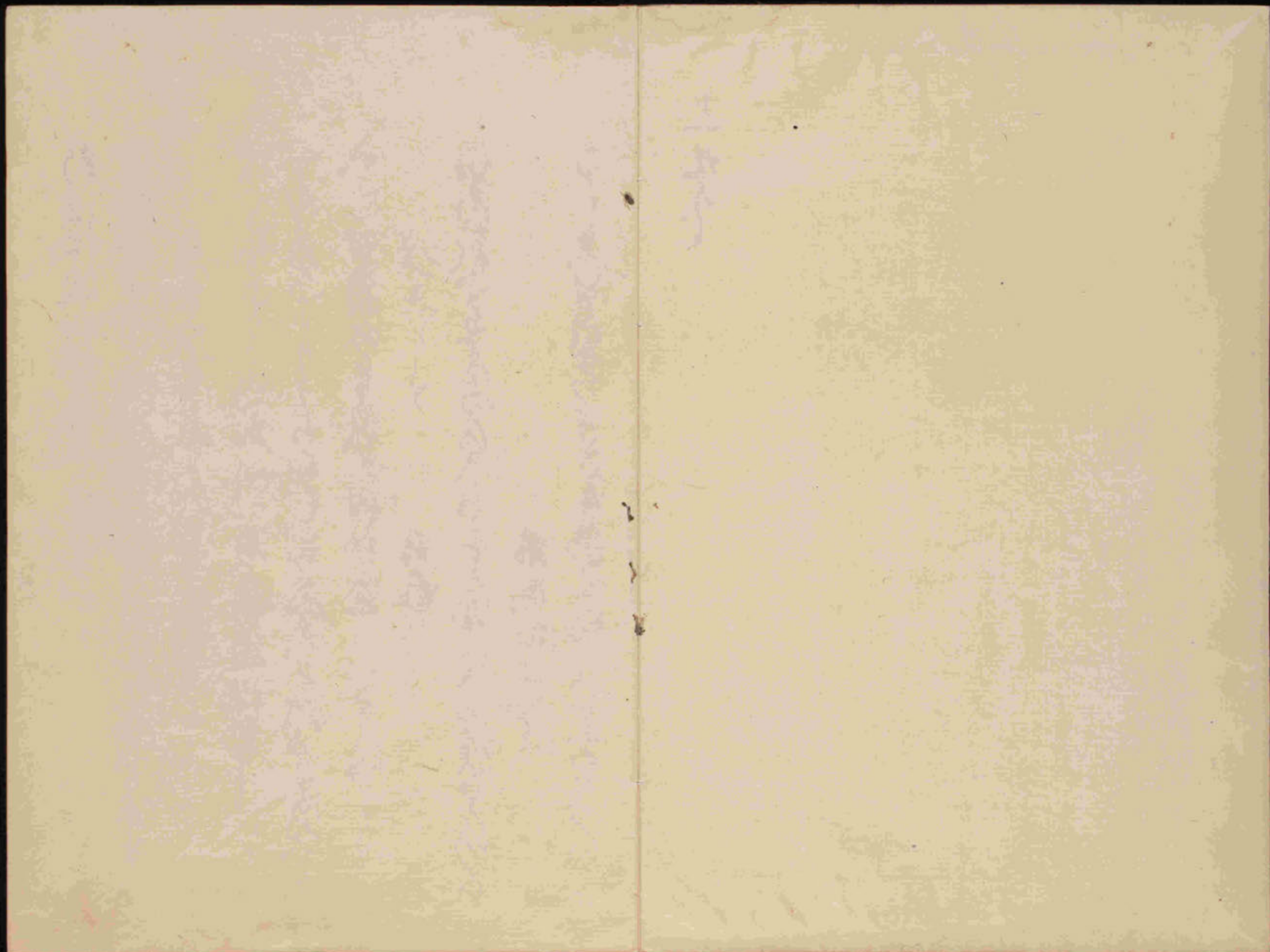


新後拾遺和歌集下



新後拾遺和歌集卷第十一

戀歌一

らうらう人よはらうらう

友原道信以下

ふみわたりてはらもいそむるまはりのきりなむら

百首文なりし時初也

凡大に

ゆ未いれるもんういそむるまはりのきりなむら

前同白と係

あこさしむらうらうらういそむるまはりのきりなむら

文保二年百首文なりしなり

後中納言之雄

海川いりせりなるあつるまはりのきりなむら

題云とこと 相換

みらぬの袖をうたふらふらなるあつるまはりのきりなむら

後人云と云

さつゆめもちい海河いそむるまはりのきりなむら

后二位業子

物うたふらふらなるあつるまはりのきりなむら

文保二年百首奇也

前入納を為定

去承安のりしやせゆ海川人からしことしんりりり
百首方なりし河也也

後中納を為重

後河袖の中納りんはつひとささるやしと人なり
是とく次

入道二お親王香道

とくじと定こと例の事とありしは所は定なり
前僧正兼縁

とくじと定こと例の事とありしは所は定なり
折政を政大臣

とくじと定こと例の事とありしは所は定なり

正二位通者女

とくじと定こと例の事とありしは所は定なり
女前門院四條

とくじと定こと例の事とありしは所は定なり
源義久二女

とくじと定こと例の事とありしは所は定なり
唯園法師

とくじと定こと例の事とありしは所は定なり
源直氏

海川をくぐりてはるる舟にまはるる袖を

友原頼光

ふみせん程の袖の志をいつくさるはたわさる月を

乃冬朝臣

袖をくぐりてはるる舟にまはるる袖を

宝治百首方より寄月恋

前大納言資季

わすれ川をくぐりてはるる舟にまはるる袖を

出のふちの中より寄月恋

天曆沖繁

月影をくぐりてはるる舟にまはるる袖を

後中納言重

文もくぐりてはるる舟にまはるる袖を

淡人あき守

ふみせん程の袖の志をいつくさるはたわさる月を

貞和二年百首方より

前大納言定

かういらぬ袖の志をいつくさるはたわさる月を

友原頼光

友原頼光

ふみせん程の袖の志をいつくさるはたわさる月を

百首分ちのしりしり思ふ

源守法親王

るる川島にふりてと隆興の忠より承の病をまが

女ははらひまら 友原惟成

うらうの森の下葉はくも病をまがのうらうの病

むらら次 源兼氏朝臣

我意の海にゆりまらうの言はゆりて人よまらう

為道朝臣

雲らりてゆりてと程の言はまらうの言はまらう

洞は折政家百首分ちり

藤原の後女

人らるる涙の言はまらうの言はまらう

題ちり次 友人ちり

心もまらうの言はまらうの言はまらう

建保二年の裏より百首分ちまらう

新中納言定家

く系成の言はまらうの言はまらう

是ちり次 惟宗光朝臣

心もまらうの言はまらうの言はまらう

系成朝臣

人々をいしよめらるる事いふゆかりあるものなり

芳煙恋

前大納言為定

煙を立烟りし富吉のあはれなりとありしに

信玄法師

ふりてしるるにむすこりふれ下にくれ

海守法親王

夕煙をいしよめらるる事いふゆかりあるものなり

友原為量卿下

いしよめらるる事いふゆかりあるものなり

後中納言為重

こといしよめらるる事いふゆかりあるものなり

百首のうらみ 河忠通

人上天皇

いしよめらるる事いふゆかりあるものなり

建保二年の裏百首のうらみ

後二位家隆

いしよめらるる事いふゆかりあるものなり

いしよめらるる事

三右衛門長康

いしよめらるる事いふゆかりあるものなり

貞和二年百首のうらみ

前大納言の定

とあり袖の邊よりかきわたりて白雲のうきうつりて
永徳元年五月又日暮して之首分候と
禮へ付り不言也と

二人占

高小くもくもくくくくくくくくくくくくくくくくくく
女よりのかきわたりてくくくくくくくくくくくくくくく
くくく

后を人の朝光

かきわたりて候邊の河はくきわたりてくくくくくくくくく
海

浪人なる

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

貞和二年百首あり

前中納言の明

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
建永二年八月十八日鳥羽候分あり

前大納言の家

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
題あり

基運法師

高小くもくもくくくくくくくくくくくくくくくくくく

後部行敷

人志を悔いしは次は焼塔の烟をよりにて
里のつらうさういふことなきわすれ
せんわすれぬ人女はうらまは

後二位為信

木田津海女こととてわすれぬ
わすれぬ人の袖のつらうさういふ
わすれぬ人の袖のつらうさういふ

弘安百首ありし 前大納言為信

海女は波の玉をたぐひて
百首ありし時 大納言為信



わすれぬ人の袖のつらうさういふ
保守法親王

わすれぬ人の袖のつらうさういふ
源義経

わすれぬ人の袖のつらうさういふ
道長法師

わすれぬ人の袖のつらうさういふ
実徳院信長

ついでにわすれぬ袖のつらうさういふ
百首ありし時 顯憲

前開白 彦

朽らそん後とあらゆ歌まん今ら袖とあらゆる海風

題 一 彦彦

格律師義突

身よりあらゆる衣をあらゆる袂に海袖とつみさあは

勝部師總

ちひらに思ふ一袖はほこまん恨もあらゆる袖に海

延文百首方し寄贈書

寶造院贈化大旨

身よりあらゆる衣の烟煙よこゆる衣より海風の衣よ

題 一 彦彦

音源法師

身よりあらゆる衣の衣の又烟を絶たららるる衣よ

元可法師

身よりあらゆる衣を絶たらるる衣よ海風の衣よ

源慈法師

身よりあらゆる衣を絶たらるる衣よ海風の衣よ

正三位通有女

無一袖を絶たらるる衣よ海風の衣よ

心裏ゆくりの心とあらゆる衣よ海風の衣よ

身よりあらゆる衣

大徳寺親雅

色秋の衣よこゆる衣とあらゆる衣よ海風の衣よ

百首山あり

ふと天宮

交りてはかたむねと有代のお坂とよゆりてり

歌よ

うし人あはれ

人舟のありと幾つあるかたむねとわらふ

後律師植論

交りてはかたむねの溪つらつらと波の袖ありて

小柳急治

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

交りて

後鳥羽院下野

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

道因法師

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

うし人あはれ

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

攝政大臣人下

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

交りてはかたむねの島島東うみとてありて袖

家三法師

浦風のむら境浪よゆめりゆめし河をくまひこりつ
又保百そちりり 前大納言純
いふれい我身たつにとつ細分と海よめいふゆらん
建保二年の裏百首ちりり

前中納言定家

梓弓いづ波のうらに別れはくよもさうくわめさる

新後拾遺和歌集卷第十

恋歌二

恋一巻と

後人ちりり

いよこいさ日おゆふをさうか新うらそ人のあこ

躬恒

秋風よもいとれと秋高はのめたとんぬるあふ

百首ちりり一付同恋

尾大目

西歌とゆいよに吹風のめりくらと何れゆん

恋志と

聖武天皇御製

此のころ武家より文士へ移りたるは文士は人として
くもむとさうりやうつらうめつらきうつら
よ根を人からばよもせぬとむら

後醍醐院御筆

小和歌人といふは此の祿の首より人といへばつら
は
は

平下吉兼

此のころ武家より文士へ移りたるは文士は人として

後醍醐院御筆

此のころ武家より文士へ移りたるは文士は人として

平下氏

此のころ武家より文士へ移りたるは文士は人として

素性法師

此のころ武家より文士へ移りたるは文士は人として

悪人かあす！ 後二条院御筆

此のころ武家より文士へ移りたるは文士は人として

延文二年百首方なりしなり。寄指色

等持院繪師大信

此のころ武家より文士へ移りたるは文士は人として

延文百首

後二位左大臣

うららかにけりてくはくはあはれにあらむは福のまはりなり

武朝之文明親王

我意にこそは福のまはりなりとてはなほあはれなり

善為法師

くはれはけりてあはれなりかきとてはなほあはれなり

前僧正法賢

小車にあらはれりてはなほあはれなりとてはなほあはれなり

家藤玄

為持院端下

あはれにこそはけりてはなほあはれなりとてはなほあはれなり

通書也

入道給一宗親王

いそぎに書くはなほあはれなりとてはなほあはれなり

延文百首

後光教院御歌

いそぎに書くはなほあはれなりとてはなほあはれなり

延文百首

後一人

いそぎに書くはなほあはれなりとてはなほあはれなり

延文百首

いそぎに書くはなほあはれなりとてはなほあはれなり

延文百首

前大納言為定

高澄宗歌
歌云

くさつらうりや波のまは後とぬれらるる

吾もよまらるる人もつゝあつて又世り

うらまら 大貳三位

まろちりまき屋のなれくつあまのあまの地をいぬ

延文二年百首方なりまら河守書云

等持院贈大貳

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

長安法師

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

あつた人のくさつらうりや波のまは後とぬれらるる

大申信能宣部

うつこと差そとみぬ福なりかたつゆ身下御も実

記志くは

平光後

う津津実よりをくもりきく人かろくま武家と世に

小拍院結る下家と人て之首分譲行

せりり

寐真法師

実もぬらわらふの世路ゆらこあ申こいふ事

建保二年の事百首あり

後二位家隆

まきぬ伏人の里実よりふ木橋の寄に夫はくま

守国丞

源忠氏朝長

らえぬうのをもつて世路のこいもさく国師あらん

記志くは

右善後督基氏

う津津実よりをくもりきく人かろくま武家と世に

吾曠法師

伊えくうふもむ世路のこいもさく国師あらん

前中納言李雄

あつ世のついでに世路のこいもさく国師あらん

弘安百首あり

前大納言為基

あつ世のついでに世路のこいもさく国師あらん

弘安百首あり

梅遠村

後の世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

蓮生法師

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

臥阿法師

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

友原基任

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

中務の家を親之家百首云々

平政村野下

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

元後朝臣ふもよと云ふなり百首云々

信實物言

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

起云々次 権律師秀雅

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

道勝法師

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

雅成親王

後世に世の孫とて身よをなすなり何と云ふらん

源棟義

あまのまはるいりしをよもひのふかきかき
あえ百首なりしをよもひのふかきかき

氏初之為歌

いりてはむかしはるけり
是よりしと

友原花水節下

あはれはるけり
友原元吉

友原元吉

あはれはるけり
平七時朝臣

平七時朝臣

あはれはるけり
源その宣節下

源その宣節下

あはれはるけり
祝の成光

祝の成光

あはれはるけり
源光康

源光康

あはれはるけり
百首なりし時 津守四重

津守四重

あはれはるけり
前右大臣

前右大臣

あはれはるけり
あはれはるけり

題云一紙

前大納言之奏

臣等承命奉宣上之旨云云
又保之年百首方なりけり

後山本前大納言

恨ても悉てし飽あらず月日思ふに
あえ百首方なりけり

二水法親王之奏

御座りし御座りし御座りし
今も御座りし

悉く承りし御座りし

百首方なりけり

前園白大納言

御座りし御座りし御座りし
題云一紙

御座りし御座りし御座りし

又あれは御座りし

中納言之奏

御座りし御座りし御座りし

百首方なりけり

後中納言之奏

杉江の御書に於ては、
あつては、
あつては、

お内大臣

しるべきに、

歌一十次

有原信光

御書に於ては、
百そふり、

前例白大周

しるべきに、

歌一十次

体周信

しるべきに、

信律師宣宗

しるべきに、

源和氏

しるべきに、

しるべきに、

しるべきに、

しるべきに、

しるべきに、

信律師宣宗

佛乃あらせよらぬ申すべしとて念ふにいと州人
久喜う之年七月無心百七百そふり

乃冬朝片

ぬてらり人つととらぬ申すべしとて念ふにいと州人

題名つ次

法眼能賢

しらきぬ人のつたふとぬ申すべしとて念ふにいと州人

宗書無心とて念ふにいと州人 素還法師

しらきぬ人のつたふとぬ申すべしとて念ふにいと州人

題名つ次

前僧正兼海

しらきぬ人のつたふとぬ申すべしとて念ふにいと州人

法下海每

しらきぬ人のつたふとぬ申すべしとて念ふにいと州人

後律師隆光

しらきぬ人のつたふとぬ申すべしとて念ふにいと州人

文永七年九月内裏之旨あり

前入道左大臣

しらきぬ人のつたふとぬ申すべしとて念ふにいと州人

郁著つ度根合なり念ふにいと州人

ゆきり

六条右大臣

しらきぬ人のつたふとぬ申すべしとて念ふにいと州人

新後拾遺和歌集卷第十

憲章十二

御息のつひにゆく

奥蔵院贈及大臣

ついでに父をぬくさふり侍りまきくもさる袖ハ

延安六年二月十日

ついでに父をぬくさふり侍りまきくもさる袖ハ

後光厳院御製

仍のあそびとあそびにさるさるもさるさるもさる

貞和二年正月十日

後光厳院御製

誠とてさるさるもさるさるもさるさるもさる

弘安百首方

さるさるもさるさるもさるさるもさるさるもさる

貞和二年正月十日

後光厳院御製

そはさるもさるもさるもさるもさるもさるもさる

延安六年二月十日

前日大臣

さるさるもさるもさるもさるもさるもさるもさる

源朝義の信

源朝義の信

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も
又保二年百そちなりたり

民部卿の者

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も
題云く

後二位素子

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も

久仁冬時

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も
法下受る

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も

源朝義の世も

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も

平英内

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も

後二位長綱

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も

源朝義の世も

源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も源朝義の世も

後一位宣子

いふまじいことわらわと我れにさしぬはる大育の如く
処文百そふさふかろつづくよ家殊恋ひ

後光嚴院御製

こころ小珠のあつまひあつたりとみははれん

後人納まの遠

かきてうららくくはせり粒はくふはりの糸

恋まの歌

源氏札

こころは海にうららくはるてりあつた書とく

惟宗の巻

海にこころはうららくはるてりあつた書とく

後人納まの巻を家とくくく音うらら

まのいの恋

祝部成光

文ふまの恋はうららくはるてりあつた書とく

恋まの歌

宗伴法師

情のねうららくはるてりあつた書とく

津守國友

こころは海にうららくはるてりあつた書とく

暖掛法師

こころは海にうららくはるてりあつた書とく

友原俊歌節下

侍人のみ疾の敷よく御建花のらりともいへり

津守國貴

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

前大納言後定

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

大炊御門右大臣

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

男大納言の御建花のらりともいへり

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

監命婦

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

保長玄心公事

長之位敷政

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

源氏信

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

友原宗遠

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

多良義弘下

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

物達恋入らば 法華浄毎

よめはしる恋入らばふらふ海や無らむもはたしん
延文百首文書りたり河守岡田

前周白 一書

恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海
文保三年百首文書。

前大城お定

恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海
恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海

恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海

正平二年百首文書りたり

入納之師賢

恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海
恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海

法華浄毎

恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海
恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海

法華浄毎

恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海
恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海

延長御歌

恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海
恋海に波よとつらつらつらふらふ物成恋坂の海

おき物下

永徳元年六月十日
忘別迄と云ふに御座り

後中納言重

永徳元年六月十日
永徳元年六月十日

時情無
元大旨

時情無
元大旨

百有方より一時刻迄

百有方より一時刻迄

後原為平朝下

永徳元年六月十日

永徳元年六月十日

等物後給元大旨

永徳元年六月十日

源詮信

永徳元年六月十日

後野文前内大旨

永徳元年六月十日

永徳元年六月十日

永徳元年六月十日

はついでにわがこゝろをいかにいかに
百首の方より一冊別紙

後中納言資教

昔は海にのこのかゝる夜にうららかにあつた

あつらんか

源朝光

形もつとてあつたかゝる夜にうららかにあつた

月形別紙のらん

前大納言資成

あつたかゝる夜にうららかにあつた

色方紙中一

源基時知下

今もあつたかゝる夜にうららかにあつた

建保二年の裏より百首の方より

正三位知家

暖かき夜にうららかにあつた

色方紙中一

前中納言資成

あつたかゝる夜にうららかにあつた

百首の方より一冊別紙

宗賢の院

あつたかゝる夜にうららかにあつた

祝部成豊

あつたかゝる夜にうららかにあつた

ふみ百番分命

後鳥羽院之御

あはれに思はれし御書にふたふたの御書に
かへりてあはれに思はれし御書に
おしとて思はれし御書に
おしとて思はれし御書に

共知つた良親王

後鳥羽院の御書に
百首分命は後朝臣

夫の書も今御書に改た天下

言ふまは御書に
年はつとてあはれし御書に

くろとて御書に
後朝臣とて御書に

後朝臣とて御書に

後朝臣とて御書に
二條院御書

二條院御書

後朝臣とて御書に
後朝臣とて御書に

後朝臣とて御書に

後朝臣とて御書に
後朝臣とて御書に

え良親王とくわくしゆ々書とくまはとく
海りあはしむる海にわらうことよらふあはし
へ人のとくしつうしてせむとくあはし
中院侍候

久書にわくしらよきこわつらわらうまはし
後朝臣のらひ 源季康

海りあはしむる海にわらうことよらふあはし
後二位家隆

海りあはしむる海にわらうことよらふあはし
百首あはしは 侍候あはし

えりあはしむる海にわらうことよらふあはし
又保百そあはし 法平定あはし

海りあはしむる海にわらうことよらふあはし
えりあはしむる海にわらうことよらふあはし

新後拾遺和歌集卷第十

憲守四

洞院按政家百首有り

西園寺入道前右政大臣

くもりくみれはるるにるるの言はつらむら

是とて次

後人とてと

とてはるるはるるにるるの言はつらむら

久喜の心三月書後醍醐院より首より

備せし年より時賢也

為る御旨

あつらふはるるにるるの言はつらむら

賢愛也

前入道とてと

あつらふはるるにるるの言はつらむら

貞和二年百首有り

後醍醐寺前内大臣

あつらふはるるにるるの言はつらむら

是とて次

後人とてと

あつらふはるるにるるの言はつらむら

賢愛也

津守國助

あつらふはるるにるるの言はつらむら

題あり次

久人志願

くろくこれいともうお事なれこい海女其の境を

百二奇されい河縁恋

太上天皇

心海よんをわがわらけり後とてお事なれも

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

久人志願

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

中納言

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

太上天皇

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

久人志願

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

わあがりも終り

前人納之云

遠を此歌の流りていつんり建たつて文にらわ

是不知

後二位嚴子

今んと流りていつんり建たつて文にらわ

吾意

津守四助

わあがりも終りていつんり建たつて文にらわ

百首分なりていつんり建たつて文にらわ

宗賢の侯

わあがりも終りていつんり建たつて文にらわ

是入方なり

定歌法師

わあがりも終りていつんり建たつて文にらわ

逢不書意

今事大武重家

わあがりも終りていつんり建たつて文にらわ

是也つ次

人に宗秀

わあがりも終りていつんり建たつて文にらわ

今又百首分なり

宜知の院丹波

わあがりも終りていつんり建たつて文にらわ

是

後大地之宗美

わあがりも終りていつんり建たつて文にらわ

奇園とていふ事

源頼朝

かきとて人かきとて金言よ人の園かきとて
百首かきとていふ事

約法

実の成らりては縁一也今もいふ事

あやうい

前大納言

今もいふ事かきとていふ事

題

秀胤法師

小田原の事かきとていふ事

後原行隆

今もいふ事かきとていふ事

二首

西義とていふ事かきとていふ事

実治百首かきとていふ事

号

ありとていふ事かきとていふ事

あやうい

後原長秀

る事かきとていふ事かきとていふ事

奇園とていふ事 平貞秀

いよいよ海に雲の末をうらやみ流し申はれぬ
貞和二年百六十九

お申地をぬち

ふんせん家申はる海にわしとていふは海にわしと

いふ

後人たるは

中川のおもひはるる末をくはるあまきはれむとて

後人たるは

いふちやあは破波のうらやみはるる青くち

後中納言お重家より之首あふもせり

より後不登^初と 津守同量

お申は力成らる格くちりいさふはとていふ

いふ

家祐は師

いふちやあは破波のうらやみはるる青くち

後人たるは

いふちやあは破波のうらやみはるる青くち

後人たるは

いふちやあは破波のうらやみはるる青くち

後中納言お重

いふちやあは破波のうらやみはるる青くち

前大納言家明

此の道とて此の人の所教とてんを世中此の道とてん

前大納言の家

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

延文百首のりうの家

英蓮院贈大納言

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

延文百首のりうの家

入道二水親王のりう

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

延文百首のりうの家

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

延文百首のりうの家

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

大納言の家

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

延文百首のりうの家

英蓮院贈大納言

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

延文百首のりうの家

此の道とてん此の人の所教とてんを世中此の道とてん

貞和二年百首方なりせり

後正屋前美白氏名

をこころ人のゆふゆきをみたり西歌をみよむるを
永徳元年六月十二日裏しり二十て方後
とてしりるの遠物意とてよこみ

今宰相仲光

つゆよきとてりるをみたり人かそつとてかて感持

舎不意也

祝部新親

昔ともさるるを西歌のあやせつとてみよ大英の

野一り

後律師実就

西歌の物つとてよこみとてよこみ西歌のあやせ

文保百首方よ 中文字を文宗女

とてしりるをみたりとてあやせのあやせよとてあやせ

無の方と

大中后の廣朝后女

今もよこみとてあやせのあやせとてあやせとてあやせ

世無意と

後二条院御製

よこみとてあやせのあやせとてあやせとてあやせ

世一り

今も川院を備

あやせのあやせとてあやせのあやせとてあやせ

源氏御下

つらうわが月くく人つこも海くりくくく

体周信

うしろ海くくく袖の月くくくいこくみく
百首方より一冊通不遊垂

前園白久大信

しんはるあじと家あ雨氣とつこくみよ月を好く
心ちく次 源頼朝

馬はくくくくくくくくくくくくくくく

源頼朝朝臣

とくまに海くくくくくくくくくくくくく

後二條院村繁

ちくくくくくくくくくくくくくくくく
前え百首方よりまらり

正二位隆教

あく人のくくくくくくくくくくくくく
心ちく寸 西園寺入道前右大臣

ゆきくくくくくくくくくくくくくくく
字首方儀をくくくくくくくくく

右通判菅原

西をくくくくくくくくくくくくくくく

紙あらし

法下守通

海にた誰とつらん海と鏡くらりも人の徳かぬ
前大納言の家

人いふ後よるなり氣とたふらつるふれをやどり

延文百首女よ寄鏡玉

持政大政大臣

い流りて鏡よらん女氣とつむいふ海と海にた人
心あらし

月日たつらよははるくま守流りて西氣をこらつ

延治百首女よりまらりて

前大納言の家

海にた人何れかゆらん海にたつらつらつら

新後拾遺和歌集卷第十

意平八

歌よこし

系性法師

あはれん時思ふもそを録りしうごころは袖のりこころ

友原光俊下

いと枯くもさうしむもあはれし命そ人のこころいさか

音あかあまあいに男はこころいさか

そもいあんこころいさか

馬油の

とよの越路の若人泣きて流るるもこころいさか

男は枯くもさうしむもあはれし命そ人のこころいさか

後人よこし

今こそ人よこし

意平八下

ふりかゝる思ふはあまのこころいさか

あえ百首分りし

可秋の院

いと枯くもさうしむもあはれし命そ人のこころいさか

歌よこし

あはれん時思ふもそを録りしうごころは袖のりこころ

奇書巻

新改ち改下

此よりわゆる奇書といふは元来かくあるべきものなり

奇書百首方よりなる

以下定む

此より人海といふ方ありたはわいのちの教へる

百首方よりなる

よりなる

今上天皇

此の今といふは世の世をいふは福徳の教へる

此の世よりなる

奇書百首方よりなる

漢人よりなる

奇書百首方よりなる

百首方よりなる

漢義抄の旨

奇書百首方よりなる

百首方よりなる

奇書百首方よりなる

延文三年百首方よりなる

入道二不親王天皇

奇書百首方よりなる

寄車馬を

伏見院御筆

久らふら秋の暮らうらうらみとよき病を病う

前中納言通房

こもよみうらうらこの暮らうら根うら風故を吹

起しうら

源頼朝

吹と秋一病をかこみうらうらうらうらとに根

平貞秀

くうら根をわらと暮らうらうら根と暮ら何根

弘安元年百首分り

坂本園入道前右政下

先んばうらうらと暮原し何根と秋を吹

悪うら

後人納言叔嗣

うらうらうら秋の暮原うらうら風を吹

後納言景

秋を吹うらうらと暮原し何根と秋を吹

うらうら

後三位忠通

長葛原露の情とうらうらうら秋風を吹

起しうら

泰後院宣

身と秋の末中納言の暮指は秋吹やうらうら

承宣上人

之業の終りては、日高東のしる程成すべし

若狭之長徳

わすれし置れ、煙のさかるとおぼゆると、海を吹

後恨恋 ぬ阿は師

海人の位里れ、烟のさかるとは、さかるといふゆゑ

紀後長

次へ、あすは、煙のさかるといふゆゑ、海を吹

前中納言為明

根のしほ、龍波のさかるといふゆゑ、海を吹

前中納言為長

わすれし置れ、煙のさかるといふゆゑ、海を吹

紀後長

あすは、あすは、煙のさかるといふゆゑ、海を吹

若狭之長徳

は、あすは、あすは、煙のさかるといふゆゑ、海を吹

前中納言為重

あすは、あすは、煙のさかるといふゆゑ、海を吹

若狭之長徳

あすは、あすは、煙のさかるといふゆゑ、海を吹

若狭之長徳

前周白虎大臣

くへん又方より記せられたるものなり

愈方中

津守四久

くへん又方より記せられたるものなり

貞和二年百首方より

入道権一宗親より

くへん又方より記せられたるものなり

愈方中

氏平より

くへん又方より記せられたるものなり

愈方中

亭子院御製

くへん又方より記せられたるものなり

貞和二年百首方より

純因院御製

くへん又方より記せられたるものなり

百首方より

前大納言御製

くへん又方より記せられたるものなり

如法三実院入道前内大臣

くへん又方より記せられたるものなり

人よ... 伏見院沖歌

伏見院沖歌

は... 伏見院沖歌

新後拾遺和歌集卷第十六

雜歌上

... 後醍醐院沖歌

... 百首方々...

... 大上天皇

大上天皇

... 園融院沖歌

... 園融院沖歌

... 天... 園融院沖歌

... 天... 園融院沖歌

入道親王乃亮

ふたはむのしきよのうらふらんうらふらんし月日さやい

歌よ

後之位者子

ふつていせむかひの痛のふたのさかちかちさ

法中坊運

ふみせんぬえねの杖のふたさうたふらうしゆはふし

津守四景

かきつら流しとみかた橋ふかきさうさうの痛感

法中後景

ふたはむのしきよのうらふらんうらふらんし月日さやい

ふたはむのしきよ

津守四景

ふたはむのしきよのうらふらんうらふらんし月日さやい

津守四景

ふたはむのしきよのうらふらんうらふらんし月日さやい

永福院内侍

伏人ふたはむのしきよのうらふらんうらふらんし月日さやい

延文百首方なりしむらり

攝政大臣

朝野よ強り政事のしめは仲よあなをささうりし

永仁六年十月飛山院後名社奉時を為

眺りしとふこゝに波はくまつゝまら

津守園を

初夕より進いりて運使若狭海よりとら入浪海崎と

寶治百首方より海眺り

冷泉前を政人下

和国大原公筆浪海を尺波せり云よつゝ白浪

百首方平に 今上天皇

又浪の川をさくらん海せり云よつゝあまの磯

百首方より一付 左大臣

和方此海の初と進り月の名に波打あつゝあまの磯

後中代を重

真津波より初と進り海より初と進り

波浪より初と進り あり初下

後風の初と進り真津波より初と進り

寶治百首方より波浪と

後之位を徳

あふせよと進り初と進り

歌よつゝと 源義春

境より初と進り初と進り

貞和二年百首方より

等持院 結成 大信

湖のほとり 舟屋とて 浮橋のわやう 決りたり 玄徳ん

心も 僧正定伴

昔ふ 此昔の 浮橋のわやう ありて ありて ありて ありて ありて

橋を 村

ふく 平澤の 橋より ありて ありて ありて ありて ありて

淡人 ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

初久 百首 ありて ありて ありて ありて ありて

津守 四巻

淡き ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

難方 八中 源頼 之 節

色坂 の ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

延文 百首 ありて ありて ありて ありて ありて

寶蓮 院 結成 大信

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

延文 百首 ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

攝政大臣

もよほよほとてなほと年々たるにわりのと暎とふ

難波市中に 光嚴院御齋

ふ里のりもてなほとや 枕のなほと雲とわらう

百首なほとて 付暎

入道二お親とるる

長之秋のたの秋にわらうに 暎とら後と志りけり

暎文暎とるる 内人

暎とて 暎とて 暎とて 暎とて

暎とて 暎とて

老身以後暎の後や暎の暎とて 暎とて

前大僧正様

暎とて 暎とて 暎とて 暎とて

源頼朝様

暎とて 暎とて 暎とて 暎とて

在東茶平朝臣

暎とて 暎とて 暎とて 暎とて

入道二お親とるる 暎とて

前中納言定家

暎とて 暎とて 暎とて 暎とて

述懐文をよ

前大納言為定

佐山ありまゝとる政を今一坂うと決うと

平政村朝臣

のちうと種うのちう佐山にたりとる政を

弘安百首文をよ

前大納言為定

松山う谷入信平年御事とる政を

新しう

平常願

朽ゆるるにせむと信平の政を

前参儀教有

うらまゝの海もとる政を

お通朝臣

せ中らうとる政を

婿の御親と

うらまゝの政を

身はうとる政を

信實朝臣

袖わく人をもとる政を

新しう

一和法親王御事

うらまゝの政を

述懐の中より 源義将朝臣

今も数ふべしものもおのれ海へ入るるはこれありし

後人よ

こころをよきめしむる海のものいふはうらやま

とて思ふにせむとわらば松竹もよみよきもの

後鳥羽院の御方はより伏しこころ

らから後ひ 鴨長明

とてゆふは今又おのれ海をいふはよきもの

とて思ふにせむとわらば松竹もよみよきもの

ゆきもつゆにぬるるおのれ海をいふはよきもの

百首より一はつは

頂徳院御歌

初秋の海やなほらうらやまの波もよみよきもの

とて思ふにせむとわらば松竹もよみよきもの

ゆきもつゆにぬるるおのれ海をいふはよきもの

前大納言の家

今もよき世もよき人かえりて

又保百首より 前権僧正雲雅

よき人のわらふに心よきものいふはうらやま

とて思ふにせむとわらば松竹もよみよきもの

泰玄法師

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

津守量方

世にさしつゝの事野にさなる心の中いふる人

信下を運

公徳をいふに及ばずとていふももていふ人

弘長元年百首分よりより河山家

常盤井入の前の政大臣

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

信下を運

信下を運

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

元可法師

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

信下を運

信下を運

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

信下を運

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

信下を運

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

信下を運

信下を運

何れもいふに及ばずとていふももていふ人

百首文のりー河の家

源義将印

いふはるるがさかきとまよと同く人かかきりてん

歌とて

ぬは法師

よのしゝ又かきとて次人かきとてしゝとてかきとて真山

祇部成景

静あらしふらけとて世のぬきまらこき人かき

有尔長信

いふしゝい別ての度やい里社の花もなこい

御人かき

いふはるるがさかきとまよと同く人かかきりてん

惟宗貞俊印

いふはるるがさかきとまよと同く人かかきりてん

後中納言資光

いふはるるがさかきとまよと同く人かかきりてん

源教之朝

いふはるるがさかきとまよと同く人かかきりてん

権大僧都清賢

いふはるるがさかきとまよと同く人かかきりてん

祇部成詮

源頼朝の御代に於ては、

源頼朝

源頼朝の御代に於ては、

後醍醐天皇

源頼朝の御代に於ては、

後醍醐天皇

源頼朝の御代に於ては、

後醍醐天皇

源頼朝の御代に於ては、

後醍醐天皇

源頼朝の御代に於ては、

源頼朝の御代に於ては、

源頼朝

源頼朝の御代に於ては、

源頼朝

源頼朝の御代に於ては、

後醍醐天皇

源頼朝の御代に於ては、

源頼朝の御代に於ては、

源頼朝

後醍醐天皇

と一編といふは... 弘安百首... 静仁法親王

... 述懐... 美増法親王

... 前大納言... 実教

... 報弁に... 宗鏡禅师

... 後中納言... 伊定女

... 前大僧正... 伊

... 老て... 後原... 喜

... 昌義法師

... 法中... 案基

... 性嚴法師

性嚴法師

くうにまはしつゝしせしむゆらんはのせよん歌い

平重基

あけをあらむ命のわらねしはかきしほ

くもひんくしつ物のあまらふはかきしほ

源孝行

あまらふはかきしほ今あまらふはかきしほ

後のせよんはあまらふはかきしほの袖あは

あえ百首あり述懐

後中納言雄

せ中納言のうらみはかきしほの袖あは

何れか

新後拾遺和歌集卷第十七

雜歌下

そはのりく横川は信約をたはら

友原の光

ん後せの糖地をるるに里よりいよ海師玉染の袖

新ら歌

讀人志しと

玉染の袖よう世世のたはるとんぬ美にうらたてり

述懐のよ

頼阿法師

年ともわたりたふとさかしくもいよ杉家と海の袖

中務の家を歌ふ

いよと後とみこふとく世よと海からうりた

貞和二年百首奇よ

後世を前同のく下

我んくもりわくくう方と成りてく月也としん

正申二年百首歌うけつてり

後醍醐院行歌

このつら人のたはもあはるよとて世世を月

沙拍信よ信く二るよ信くら事とるあてよ

この信まの

前大信正通春

新といむくたあふ信をくうそめそあは世世の月

御一々

後之位為理

御身より御言女御月御等々なる御事あり

永和二年八月廿八日又東之首の儀と

折政と政大臣

今も御事と云ふ御事御の御事と云ふ御事と云ふ御事

御一々

御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

源光行

老身御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

場子の御事

御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

建保二年御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

大納言御事

御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

御一々

御下延令

御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

貞和百首あり

前大納言と云

故の御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

題不知

奉定國師

御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事と云ふ御事

源頼貞

信長親身より文政の月には成るの跡あり

因信月と

中岡公を前右政大臣

信長親身より文政の月には成るの跡あり

信長親身

前中納言定家

信長親身より文政の月には成るの跡あり

津守國冬

信長親身より文政の月には成るの跡あり

平直基

信長親身より文政の月には成るの跡あり

中折法師

信長親身より文政の月には成るの跡あり

友原為量朝臣

信長親身より文政の月には成るの跡あり

文保百有方より

前大納言文政

信長親身より文政の月には成るの跡あり

信長親身

後信正良遠

信長親身より文政の月には成るの跡あり

信長親身

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

ほ下宗信

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

有原高龍

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

前住信正身册

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

と音る連

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

侯人とて候

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

ほ眼習承

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

弘安えと百首あしりなつた

前入納とある

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

あつたもあつたさうさうたうたのわしちとまをば

昭文法師

一、
二、
三、
四、
五、

憲実法師

六、
七、
八、
九、
十、

兼方とて

夏宗圓師

十一、
十二、
十三、
十四、
十五、

源氏直

十六、
十七、
十八、
十九、
二十、

格少傳師之家

二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、

起てんと

後人不念

二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、

三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、

須要法師

三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、

道雄法師

四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、

今寧人武高を

四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、

小町

と云ふは、いふもせらぬは、まの人のくたはるゝ

前大納言の家

定むる人、いふは、くちをいふも、いふも、いふも、いふも

後人といふ

いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも

和文百首より述懐

前中納言雅春

和文の力、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも

和文二年、後園の宣命、いふも、いふも、いふも

述懐に、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも

いふも、いふも、いふも、いふも、いふも

攝政を政大臣

いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも

百首より、いふも、いふも、いふも、いふも

後中納言の事

いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも

和文百首より、二條院讃岐

いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも

和文二年百首より、いふも、いふも

等持院福元大臣

我らにわが風吹く一らもくははのめりし海
負和百首方ちねまらついでり

久嚴院御歌

ナニわら世にたゞくはちく民とくはは
道人は師病よりついでゆるりよ泰山府君
はらへいしやとてふ口なとくうつらけり
らにこころちゆら

左馬場格直義

あはれもわもわらふ余らうたさくもまん
あはれもわもわらふ余らうたさくもまん

とくうら

あはれ師

世にたゞくはちく民とくははのめりし海
あはれ師

あはれ師

後入信初歌源

いはいあはれ師

後信正果守

又よ今までいはいあはれ師

西岡ち前内入信女

とくうら

源高秀

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

馬浦朝臣

きよきよ^今とくさくさの音かきつらばるるうらむを

橋重吉

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

源文正

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

三谷資連

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

信正承縁

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

後女信初運圓

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

光嚴院御簀

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

前信正尊玄

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

法眼宗師

ふらふらとくさくさの音かきつらばるるうらむを

前大僧正桓惠

るい教のそけうのうらひまの我あしゆいるにえは

湯子内親王家寧お

初めよき音の愛はふさびしとに守り使をん

弘安百首奇に 前大納言の氏

うらとくふるは現わらふこそ愛とて愛こそあら

六条掾政乃らふいよゆかりぬいあら

前大納言忠良

愛のい又もいふい西教のやうにまゝいふい

ゆいしと 貫之

とらうあふもあふまてとらうあふもあふまて

せはるるはとていり

後掾掾政前大政大臣

鳥部山あふれ人の増ら清也未の御らあふ

ねもくわつていふくは林院よまらりまら

なごらり人のいかに換てつら

良暹法師

けせよまふたやうにいそとて増こあふん夕と

西園寺大親とて山階入道前大臣

山陽人のあふのまゝとていふ袖うらわらと

女を以てしむ事なき言に後帝初執政の時
より御書は御書と申す御書御書と申す御書
と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

前中納言定家

おのれが御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

前中納言有志

人の御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

一御書と人

御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

高麗上人

世中御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

前京兆後朝長

御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

御書

信実御書

御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

後二條院御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書
御書と申す御書と申す御書と申す御書と申す御書

はらとらん

湯子日記

今世に就りぬるわが身を誰か我の徳とせん
れうらぬのたまらよき世にうらむれは
後くつらむら 友原仲文

ふりてせむらうことよき世にうらむら
むらむら 後人志願

むらむらむらむらむらむらむらむらむら
祖父國勝の世に廻り佛のしむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむらむら
津守國勝

むらむらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむらむら

はらとらん

前入納之為氏

管乳根のむらむらむらむらむらむら
世中とらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら

源順

世中とらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら
後入納之為氏

東葉の信り病と云ふことありけり

源仲徳

後身東と急葉と云ふ病の身なりと云ふ事
又よと云はて後身載の指りと云ふ事

藤原の俊成

と云ふ病は信り病と云ふ事
有東の家と云ふ事
てつらと云ふ事

周防の信成

病の森の事と云ふ事
前入納と云ふ事

信成に懐四と

雄飛の信成

から病と云ふ事
氏と云ふ事

惟宗の信成

病と云ふ事
後深の病と云ふ事
月の病と云ふ事

伏見院の信成

から病と云ふ事
女と云ふ事

しん下り美甚

あつらひのしん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り

しん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚

しん下り美甚と云ふはあつらひのしん下り美甚

新編拾遺和歌集卷第十八

釋教部

親教師の高山歌詠のり紙

皇太后文更後成

和日... ぬの雲の白と... ぬりて人... ぬりぬり
ぬりぬりぬりぬり 申務り宗を親を

い... ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
方便も唯一宗法... 二宗... ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

入道總一和親とる宗

ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

新編拾遺和歌集

源実朝人

ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

法親師序... 是知今佛歌詠法母也

後醍醐院御製

ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

おきふ

寐枕法師

ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

和文... 月のつゝ家と... ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

成身法師母

ふんわり出入月とくうてふふらむとくうてふふ

冥塔示

は眼涙取

昔は海と玉の砌におくく光と日と秋の月の

心とく

候人ら

今とく心は心よ雲晴く死ともものさすの月

杜綱地名同海健坊力候音のつひ

考政と人

然とてふの端とて成まじむ一月日と相そふ

化城喻示のつひ 前大信心札伸

うふゆら我力よとく無よ縁とてとくふとくふ

心とく

ふ人ら

かどきも散りもたはらひのつひに心とく

唯識論と

津守問友

こころとくふとくもつひに心とく

心とく

是深法師

ふ人の心つひのつひに心とく

心持の増不減と

心持法師

かほりあはれとくふとくもつひに心とく

秋散りとく

夢文玄圃師

雲らりともはたなりやうみよと月よそやいかり

舍利講

後集初撰政前大政大臣

秋らういふ月をけりてくせりぬとていふ

親量方經乃得益分と

信生法師

隔らうせはほそく多治く有きうとあ月はらりか

忠於西方と

示證上人

八月のちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

華嚴經のちとてとてとてとてとてとてとてとてとて

信律師筆書

ふともうむし日名れ新めれいさ地なると志照とて

百日入堂のうとてとてとてとてとてとてとてとてとて

てりてゆきり

入道二不親とてとてとて

あむしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

能とてとて

前入僧正通玄

誰よ又とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

秋連法師

湯りあら水ぬと月いやらとてとてとてとてとてとてとて

賢珠上人

みうらせ人のふとてとてとてとてとてとてとてとてとて

後人云々

人かしの法の子孫とつてても水たな根母ららん
観經釋文釋迦此方發遺跡隨即復國
未途 前人納之為家

船よるまよむしう海もく地せの教よ作くし海ん
囑累品今以付囑汝等八人と色よとせ
しうゆきり 前人納之其を

也とて地と浦のり海なるてたに能念すあり
涌出亦又サ而子苑
法眼源承

年毎道に松のりういしうぬあさつてく是下
十戒をいりうとせあつてうら

寐枕法師

い地のせりしういりて其うに心いりて
囑累亦令一切衆生當得同知と

入道贈一亦親とる時

い人か地せの教とつてうらうら子孫を賜れ
前人納之為定十二の佛より一亦授とる
ゆよ入百才子亦のりて海を

後中納之為重

まよふをばたき交ひしをいづるよもいづるまよふ
むらさき

重阿上人

ふとそはたしむる事深ん交れうのまはるる
涅槃浄くともま

赤深坊

今もそはたしむる事深ん交れうのまはるる

むらさき

如月法師

はたしむる事深ん交れうのまはるる

此身何足駄一聚虚也磨

延慶院浄観

いづるまよふをばたき交ひしをいづるよもいづるまよふ

いづるまよふ

新後拾遺和歌集卷第九

神祇歌

弘長百有方よりまゐりしは神祇

後九条前内大臣

世よりよもてゆかしの後そと神祇の心は

貞和百有方よ 等持院贈氏大臣

舟波のかみりも世に男心とてかみりしをちりし

石清水社方合よ 源家長朝臣

八幡山社やまゐりん媽の杖若くともかたはら

百有方よりしは 攝政右大臣臣

昔より神のまこととて世にまじりし衆の心

むらみは 中臣延朝

はくしとてかみりしを山とてかみりし神の心

後西園寺入道前右大臣臣

一とらよ世にまじりし神の心は

建暦二より十二月和方前右大臣臣

前中納言定家

はくしとてかみりし神の心は

又承二より二月二より田舎りてまゐりし神の心

ふよとてかみりし神の心は

中務の宗を叙す

林也又とてぬたと叙すも其意の言ふこと成る可也

社所述懐と

信実綱目

左の所叙はしく色ありと見ゆるを其意の言ふ事

新玉津嶋社方合より神祇

前大儒正久海

此は高きことなること其意の言ふ事と見る可也

新

若木田舎也

中流河を其意の言ふ事と見る可也

百首方なること一社祇

此人也

新いふ家なること其意の言ふ事と見る可也

新

恒助法親也

この事なること其意の言ふ事と見る可也

源歌氏綱目

この事なること其意の言ふ事と見る可也

新神成誓

此の事なること其意の言ふ事と見る可也

梅宮の立極の目より

持女僧如慶有

又よ今親く物のみくしらすとそあはらふらん

むららと

笑我猶久

雲かし祓代もくしらすとそあはらふらん
勿久百首あまのりきり海

正二位澄教

衣はもくしらすとそあはらふらん

祓代のみよ

法眼玄全

幸崎やもくしらすとそあはらふらん

津守国冬

林垣の松もくしらすとそあはらふらん

むららと

法眼福教

林垣やもくしらすとそあはらふらん

倉重朝勝

此橋よりくしらすとそあはらふらん

津守国平

真はもくしらすとそあはらふらん

百首あまのりきり海

指中納言重

あはらふらんくしらすとそあはらふらん

津守国量

しらぬふらふの垣漱よわらぬ若うめ緒は林
新しうと

有る敏行朝臣

須吉丸の州まつくらうまにじう大蛇を地
おん

新後拾遺和歌集卷第十

唐梨女

しらと

前大納言為氏

和国津海乃長所大敷よわら新う久し君うまを
お申納言通房

お申納言通房

林の藤としらをまじれまうはわあ代り敷

建保二年百首あり

前中納言定家

鳥野川いんとうの歌よはの歌いんを秋末の山が
申あり歌集あ春とつらと後とつ後

まのやれよまのやれよ

後醍醐院御製

河津の流とて流しよまのやれよ
九重の百代のつら
永和元年三月廿九日
松樹を久しとて
と流しよれよ

五上天皇

十の流とて流しよまのやれよ
松樹を久しとて
永和元年三月廿九日
松樹を久しとて
又保百首のまのやれよ

以下定ぬ

まのやれよまのやれよ
松樹を久しとて
永和元年三月廿九日
松樹を久しとて

後醍醐院御製

男の今と百代のつら
松樹を久しとて
永和元年三月廿九日
松樹を久しとて

二條院御製

わが流とて流しよまのやれよ
九重の百代のつら
永和元年三月廿九日
松樹を久しとて
と流しよれよ

後醍醐院御製

河津の流とて流しよまのやれよ
九重の百代のつら
永和元年三月廿九日
松樹を久しとて
と流しよれよ

後醍醐院御製

海をくわく時序はりて

前園白と書

ふ年ごもいのかさくしつりきり月とさしむる者たは
難方中よ 前入納る為定

仰るもろのこしつれはらもは極之り君の代は
永徳元年六月十日辛酉朔備とて積し

河内道祝

八人信

おこちの家出代はつらとて久よとんてこちのあつ
寛元二年入葺し云のる基方た女二あり
約せらよ書れあち日九をた久月とらつるん

つらつとちとつらつら白書と常盤女入道

ある政と白れもとらつらつらて約せら
也すよ 後深草院女内侍

九年たらつら君に流つきとらつらとて母のたとらふ
院園後白とつらつらつらつらつらつらつらつらつら

ちんちん 後伏見院御掾

百あつらみらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
御也 院園後御掾

ももあつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

新元百首方よりきりよれ

後醍醐天皇御前入政大臣

宣代まゝよりわたりてふ宮の御子を承継せしむる事

難の御方中に 後二條院御製

と砂の如くもゆくりねえの趣もよきとて承継の事

皇子院の六十賀女御御の御息所はなり

より山内守の御方 伊勢守

御方より年々よりゆくりねえの御方よりゆくりねえの御方

元久二年新古今責富の御方

後二位家隆

志とあらふ御方玉原とみかたの御方よせとてふ御方

文永二年新古今責富の御方

尾を清仲の御方

多や又代はありてふ御方よせとてふ御方

後醍醐天皇御前入政大臣

御方よせとてふ御方よせとてふ御方よせとてふ御方

永和元年大嘗會御前入政大臣

の御方

儀同三司

新元百首方よりきりよれ

十の御方よせとてふ御方

此集依繪命勅公澄奉之書寫之此後及教
序之記

晉文明九年孟秋下旬假

藏人取右道中將藤原實隆

唐安三年八月六日一極

延喜十九仲夏寸一極

